印度學佛教學研究第37巻第2號　平成元年3月

仏説大乗観想曼拏羅浄諸悪趣経について

乾　　仁　　志

I. Durgatipariśodhana-tantra(DP) は『真実摂経』(TS) の釈タントラとして知られ，インド・チベット密教では大いに流行した瑜伽タントラの一つである。

ところで，DP は中国や日本ではほとんど流行せず，僅かに宋代に漢訳された文献が伝わるのみである。この漢訳文献は具さには『仏説大乗観想曼拏羅浄諸悪趣経』(大正19巻939番) と言い，従来，チベット蔵経に伝わる二本の類本――すなわち，Bu-ston(B) の言う[1]『清浄タントラ』(sbyoṅ rgyud, DP-A：東北 No. 483, 大谷 No. 116) と『九仏頂タントラ』(gtsug dguhi rgyud, DP-B：東北 No. 485, 大谷 No. 117)――の中，後者 DP-B の抄訳として紹介されてきた[2]。しかし，今回筆者が調査した結果，この漢訳文献はチベット蔵経に存在する Ānandagarbha(Ā) 造の曼荼羅儀軌に相当する文献であることが判明した。この儀軌は先述した様に中国や日本ではほとんど顧みられることがなかったが，インド・チベット密教に伝わる DP 関係の文献群の中では最も重要なものの一つで，DP の流伝発展の上で重要な位置を占めていると考えられる。そこで，以下には先づこの儀軌のチベット蔵経における所在を明らかにし，その上で更にこの儀軌と密接な関係をもつ DP-B の成立事情について私見を述べたいと思う。

II. この漢訳儀軌は宋代の法賢によって訳出されたもので，『大中祥符法宝録略出』によれば至道2年 (A. D. 996) の訳出とされている。訳者の法賢は端拱2年 (A. D. 989) から咸平2年 (A. D. 999) の間に76部114巻の経典を訳出した翻訳官で，咸平3年 (A. D. 1000) 8月4日に示寂したと云われる[3]。

この儀軌は，先述したように，これまで DP-B の抄訳かと推定されてきたが，チベット蔵経にはこの儀軌に相当するものがあり，Bはこれを『九仏頂軌』(gtsug dguḥi cho ga, DPV) と呼んでいる[4]。すなわち，Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi-nāma (東北 No. 2635, 大谷 No. 3460) がそれである。訳者は Buddhśrīśānti と Rin chen bzaṅ po (A. D. 958—1055) で，10世紀後半から11世紀前半にかけての訳と見られる。それ故，チベット語訳と漢訳はほぼ同時代の訳出になる。

この DPV の内容はおよそ別表のようになっている。各文段の項目は漢訳には明示されていない。これらはチベット語訳に基づいた名称である。なお，チベッ

ト語訳は便宜上北京版を用いた。

内　　容	Tib. Pek. Gu 帙	Ch. 大正 19 巻
◦帰敬文	201b$^{5-6}$	88上後$^{6-5}$
◦序　文	201b$^{6-7}$	—88上後$^{4-3}$
1. 前行修法 (sṅon du ḥsñen cho ga)	210b^{7}—210b^{1}	88上後^{3}—93上^{3}
2. 浄地作法 (sa sbyoṅ ba yi cho ga)	210b^{1}—211a^{5}	93上$^{4-10}$
	(210b$^{1-4}$	93$^{4-10}$)
	210b^{4}—211a^{5})	——)
3. 曼荼羅を描く作法 (dkyil ḥkhor bri baḥi cho ga)	211a^{6}—214a^{5}	93上^{10}—94中^{7}
	211a^{6}	——
	211a^{6}—211b^{4}	93上^{10}—93中^{2}
	——	93中$^{3-10}$
	211b^{4}—214a^{5}	93中^{10}—94中^{7}
4. 瓶を準備して安置する作法 (bum pa sta gon du gnas paḥi cho ga)	214a^{5}—214b^{3}	*95上^{28}—95中^{2}
5. 曼荼羅の護摩作法 (dkyil ḥkhor gyi sbyin sreg gi cho ga)	214b^{3}—215a^{4}	*95中$^{2-27}$
6. 南方門でなすべき作法 (lho phyags kyi sgor bya baḥi cho ga)	215a^{4}—216a^{6}	94中^{7}—95上^{27}
◦結　び	216a$^{6-8}$	95中^{28}—95下^{1}
◦奥　書	216a^{8}—216b^{1}	——

さて，チベット語訳は真言文を除いてほぼ全体が 7 シラブルの偈頌形式で記述されており，その依用した Skt. 原典が本来韻文であったことを窺わせる。それに対し，漢訳は一部を除いて散文形式で記述されており，チベット語訳に比べて，意訳的な表現が目立つ。

全体の内容は別表に示したように 6 章からなる。第 1 章の前行修法が本軌の中心で，全体の約半分にあたる頁数がこの記述に割かれている。Ā は Sarva-vajrodaya (VU：東北 No. 2516, 大谷 No. 3339) の中でもこの前行修法 (sṅon du

bsñen pa, pūrvasevā）という用語を用いているが，Bによれば，それは阿闍梨の事業に属し，「曼荼羅を描く前に本尊に親近する」ことであると言う[5]。内容は本尊である九仏頂尊を中心とした曼荼羅の成就法である。その中心は，いわゆる ādiyoga, maṇḍalarājāgrī, karmarājāgrī の三種三摩地（samādhitraya）によって構成されている。DPV には更に続いてその後半分に，浄地作法・曼荼羅を描く作法・瓶を準備して安置する作法・曼荼羅の護摩作法・南方門で行なう作法が説かれている。およその傾向としては，同著者の VU とも共通する。ところで，別表を見て分るように，漢訳には一部内容が前後する所（＊）があるが，これは恐らく法賢の原本が一葉分前後しており，それに気付かず法賢がそのまま訳してしまったことに原因すると考えられる。その他，漢訳には欠文あるいは省略が認められ，またチベット訳にない文（増広文）もある。これら若干の相違点があるが，ほぼ全体の構成や内容もチベット訳に符合し，この法賢訳は Ā の DPV に相当するものと結論づけられる。

III. 先述の如く，DP にはチベット語訳として二本の類本が伝わっている。この中，DP-A は古く『デンカルマ目録』にも記載されており，その成立は8世紀末までにはあったと考えられ，DP-B は訳者の生存年代から考えて12世紀末までに成立していたものと見られる[6]。それ故，基本的には DP-A が先に成立し，DP-B が後に成立したと考えて大過ない。DP の Skt. 写本は現在数多く発見されているが，その何れも DP-B に属し，DP-A の Skt. 写本は未だ発見されていない。これは一つにはネパールでは専ら DP-B がもてはやされていたことに由ると考えられる。ネパールでは更に九仏頂の瑜伽次第[7]も作成されており，その隆盛ぶりが窺い知られる。なお，Skt. 写本としてはチベット語訳以前に遡るものはまだ発見されておらず，何れも比較的新しいものが多い。

この両本には，内容上符合するところが可なりあるが，全く同じではなく相違点も見られる。この両本の比較対照は既に Skorupski 氏によって行なわれているので[8]，詳しくは氏の研究に譲り，今は両本の特色を簡単に指摘しておきたい。

先づ DP-A はチベット語訳に従えば全体は三章に分けられる。注釈ではそれぞれ因縁段を含む根本タントラ・続タントラ・続々タントラに区分されている。第一章の因縁段に続く根本タントラには，根本曼荼羅として普明（sarvavit）の曼荼羅が説かれ，第二章の続タントラには，釈迦牟尼より無量寿に至るまで9種の曼荼羅が説かれ，第三章の続々タントラには，転輪王と忿怒火日の2種の曼荼羅が説かれている。一方，DP-B も DP-A の内容区分に従えば三章に分けること

ができる。DP-B では，第一章には DP-A の普明に代って，根本曼荼羅として九仏頂の曼荼羅が説かれている。第二章には DP-A と等しく9種の曼荼羅が説かれ，第三章には転輪王の曼荼羅のみが説かれるだけで，忿怒火日の曼荼羅は存在しない。それ故，曼荼羅としては DP-A には12種類の曼荼羅が説かれ，DP-B には11種類の曼荼羅が説かれている訳である。また，第二章の釈迦牟尼曼荼羅の後に Vimalamaṇiprabha に関わる話などが DP-B に見えない他は，その内容の相違点はほぼ第一章と第三章に限定される。

ところで，B はこの DP-B の内容に関して大変興味深い指摘をしている。すなわち，B によれば，DP-A とほぼ同文の第二章は別にして，DP-B の第一章に相当する箇所には，DP-A の他にも，Ā によって著わされた二つの儀軌，つまり VU と先述の DPV と内容を等しくしたところがあり，また第三章にも DP-A 及び DP-A の第一章から引かれた部分の他に，VU と内容を等しくしたところがある。そして，この事実から，B はこの DP-B のインド成立説に疑問を投げかけている[9]。事実，DP-B と他の文献との対応関係については既に個々に指摘されている[10]。ともあれ，この B の指摘の裏には，この DP-B が DP-A をベースにしつつ，Ā の以上の二儀軌に基づいて新たに作成されたという見解を読み取ることができる。このBの説が妥当かどうかは更に詳細に註釈や儀軌類を総合的に考察しなければならないが，筆者は現時点では以下のような理由からそれは妥当と考えている。

まず第一点は三種三摩地の問題である。DP-A には三種三摩地の項目名はない。それに対し，DP-B には三種三摩地の各項目名が見られ，タントラとしては異色な体彩になっている。それ故，B は DP-B のタントラとしての性格を疑問視している訳である[11]。三種三摩地の名称そのものは TS の釈タントラである Vajraśekharatantra (VŚ：東北 No. 480, 大谷 No. 113) に初見する[12]。そして，この三種三摩地という概念をタントラ解釈上最も重要視し常用したのが Ā である。Ā は TS を解釈する上で VŚ 等に依存し，三種三摩地という概念に注目して，TS を始め Śrīparamādya, Māyājāla, Guhyasamāja といった重要なタントラを分析する場合にもこの概念を用い，Ā 造として伝わる DP-A の註釈にも用いられている。もちろん，註釈類のみならず，儀軌類においても，阿闍梨の事業として説かれる本尊瑜伽の構成にも用いている。しかし，註釈したところの各々のタントラには本来三種三摩地の各項目名は見えない。三種三摩地というのは，あくまで Ā が各タントラを解釈する上で，また各儀軌の成就法を構成する上で採用

した主要な概念であったと考えられる。それ故，DP-B の中に，この三種三摩地の項目名が用いられていること自体奇異な印象を受けざるを得ない。この DP-B が，もしもĀ に先立って既に存在していたとするならば，Ā が DPV を著わす以前に，VU や TS などの註釈において，DP-B に触れているはずである。ところが，DP-B の第一章に説かれる三種三摩地や第三章に説かれる弟子入壇等の文に関して全く解れないのは，Ā の時代には DP-B はまだ存在していなかったと考えるより他ない。このことは DP 関係の註釈が何れも DP-A に関するもので[13]，DP-B に関するものが存在しないことに対応する。

第二点は九仏頂(Navoṣṇīṣa)曼荼羅の問題である。一般に九仏頂曼荼羅と言う場合には，DP-B の根本曼荼羅としての九仏頂尊の曼荼羅を指す。すなわち，中轂に釈迦牟尼如来 (Śākyamuni, Śākyasiṃha)，東輻に金剛仏頂如来 (Vajroṣṇīṣa)，南輻に宝仏頂如来 (Ratnoṣṇīṣa)，西輻に蓮花仏頂如来 (Padmoṣṇīṣa)，北輻に一切仏頂如来 (Viśvoṣṇīṣa)，東南輻に光仏頂如来 (Tejoṣṇīṣa)，西南輻に幢仏頂如来 (Dhvajoṣṇīṣa)，西北輻に利仏頂如来 (Tīkṣṇoṣṇīṣa)，東北輻に傘仏頂如来 (Chatroṣṇīṣa) を安立するのがそれである。ところが DP にはもう一つ九仏頂曼荼羅が存在する。それは DP-A，並びに DP-B のそれぞれ第二章冒頭に説かれる釈迦牟尼曼荼羅である。この曼荼羅も釈迦自在主牟尼 (Śākyādhipendramuṇi) を中轂に，東輻に金剛手大力 (Vajrapāṇi mahābala)，南輻に勝仏頂 (Jayoṣṇīṣa)，西輻に転輪王 (Cakravartin)，北輻に尊勝 (Vijaya)，東南輻に光聚 (Tejorāśi)，西南輻に能破 (Vidhvaṃsaka)，西北輻に能砕 (Vikiraṇa)，東北輻に白傘蓋 (Sitātapatra) を安立し，註釈ではこの九尊を総称して九仏頂と言う。あるいは中尊を除いて八仏頂，あるいは金剛主大力を除いて七仏頂とも言われている[14]。それ故，DP-A では第一に普明曼荼羅を説き，第二に九仏頂曼荼羅を説いていることになり，同様に DP-B では，第一に九仏頂曼荼羅を説き，第二にも九仏頂曼荼羅を説いていることになる。この二種の九仏頂曼荼羅の尊容と尊名から両者の間には親縁関係のあることが既に氏家覚勝先生や田中公明氏によって指摘されている。異なるのは，東南西北の四方尊が DP-B の根本曼荼羅では金剛界の五部立てに従って編成されていることである。このことから，両氏が指摘されたように，むしろ仏頂尊の素朴な形態（胎蔵系の五仏頂尊）を有している釈迦牟尼曼荼羅を基にして，尊名の上からもはっきりと金剛界五部立てに新しく再編成されたのが根本の九仏頂曼荼羅であると結論付けられる。この両曼荼羅の親縁関係については九仏頂曼荼羅の成立後において自明のことと考えられていたようで，このことはインドの有名な

学匠に仮託されたものがほとんどと伝えられる註釈類の中に，釈迦牟尼曼荼羅の九尊がそれぞれ九仏頂曼荼羅の九尊に当ることをはっきりと指摘しているものがあることや[15]，またネパールの九仏頂の瑜伽次第のように，九仏頂曼荼羅として釈迦牟尼曼荼羅の九尊の名を併記するものもある[16]ことからも知られる。ということから，更に DP-A から DP-B の成立に至るまでの間に，DP-A の第二の釈迦牟尼曼荼羅を基にして先づ根本の九仏頂曼荼羅が成立してその儀軌が著わされていったと見られる。チベット蔵経に収蔵されている儀軌類には大別して二種類ある。一つは普明曼荼羅を説くものであり，もう一つは根本の九仏頂曼荼羅を説くものである[17]。インド・チベット密教では，悪趣清浄曼荼羅としては普明曼荼羅に劣らず九仏頂曼荼羅が特に尊崇されていたことが知られる。この九仏頂曼荼羅への厚い信仰から，その古型である釈迦牟尼曼荼羅では満足できず，ある時代に九仏頂曼荼羅を根本とした本軌が求められたのであろう。DP-B のチベット語訳が DP-A や DPV に比べて比較的時代が下がること，DP-B の註釈が存在せず，九仏頂曼荼羅を説く儀軌類が多く存在すること，チベット密教史の中で，DP-B の註釈が求められた形跡が見あたらないことなどから，DP-B は DP-A より遅れ，しかも九仏頂曼荼羅の成立後に改めて編纂されたと考えられる。

以上の点から，筆者はBが指摘している如く，DP-B の成立には DP-A と共に Ā の二著作 DPV と VU の影響力が大きかったと考える。また Ā は瑜伽タントラの実践に巧みな学匠として名声が高いこともその一証左となろう。

---

1) 東北 No. 5104 (Da 39a～41a)　4), 9) 註 1) を参照。　5) 東北 No. 5105 (Da 198 a)　6) See T. Skorupski, *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra*, 1983, Motilal Banarsidass, p. xxiv.　7) 氏家昭夫「悪趣清浄マンダラとその観想」(密教学研究 7)　8) See T. Skorupski, ibid, pp. xviii～xxiv.　10) 酒井真典「悪趣清浄軌について」(密教文化 123) の論文は結局『九仏頂タントラ』と『九仏頂軌』の対応関係を示したものとなる。また『一切金剛出現』との応対関係については森口光俊「Palm Ms: Sarvavajrodakā について」(大正大学綜合仏教研究所年報 6) を参照。　11) 註 1) 並びに同書 (Da 88ab) を参照。　12) D. Ña 170a-171a, P. Ña 192b-193b.　13), 14) 東北 Nos. 2624-2628, 大谷 Nos. 3451-3455.　15) 東北 No. 2627, 大谷 No. 3454 (Khu 283b-289a)　16) 東大写本 No. 446 (pp. 10-11) etc. を参照。　17) 普明曼荼羅を説くものは東北 Nos. 2630-2634, 大谷 Nos. 3457-3459。九仏頂曼荼羅を説くものは東北 Nos. 2635-2639, 大谷 Nos. 3460-3462。

<キーワード>『九仏頂軌』,『九仏頂タントラ』, Ānandagarbha

(高野山大学助手)